

介護福祉士養成校の学生が実習先で違和感を抱いたエピソードについての研究①

—違和感生成の過程とその影響 X県 A校の事例から

Keyword

介護福祉士養成・介護実習・リアリティショック・職員像・違和感

鶴房 祐治 介護老人保健施設 アロフェンテ彦根
大原 英子 滋賀県介護福祉士会
川添 誠 介護老人保健施設 ケアポート栗東
荒木 猛 特別養護老人ホーム 菖蒲の郷

I 研究目的

介護実習施設・事業等において介護福祉士養成のための実習は、「実習施設・事業等(I)」と「実習施設・事業等(II)」に区分され、それぞれの実習の狙いが示されている。その中で、実習施設・事業等(II)における介護実習では、継続した介護実践において「介護過程」の展開を通して根拠を持った生活支援を行うことを目指す。

当研究メンバーには介護福祉士養成教育に携わる者もいるが、この「実習施設・事業等(I)(II)」での実習において、学生が『実習先で起こった驚きの出来事や疑問を口にする事が多い』ことを認識している。

ゆえに、「介護という仕事には、介護を行う者の人間性によって介護の質が左右されてしまうという特質があり」、また、「自分の介護観や人間観などは介護技術を通して表現される」(日本介護福祉士会 2009)ため、実習先の職員の実践が模範的であるかどうかは学生に与える影響は少なくないと考えられる。そのような中で、実習生がイメージする『介護者像』や『職業的態度』と、実習指導者や働いている職員の実践の間に何らかのズレを感じることが多々あると想定される。

このズレの実態を明らかにし、このズレから生まれた「介護の現場への戸惑いや動揺などの感情(「学校での学びを超える想像以上の学び」というポジティブなニュアンスも含む)を本稿では「違和感」と定義する。

その上で、どのような“ズレの実態”がどのように違和感を引き起こしているのか、そしてその違和感がどのように実習生に内在し、肯定的・否定的な意味を帯びていくのかを明らかにしたい。

介護実習生が実習において抱く“違和感”を扱った先行研究としては、伊藤(2007)、上田(2005)

など、実習におけるリアリティショック¹⁾の様相を研究したものが数点存在しているが、実習生がイメージする『介護者像』や『職業的態度』と、実習指導者や働いている職員の実践との間に生じたズレによる“違和感”に特化し焦点を当てた研究は少なく、例えば、実習生のリアリティショックの様相とし、「実習イメージのズレ」「実習生像のズレ」「自己像のズレ」「職員像のズレ」「高齢者像のズレ」「特養イメージのズレ」という実習生自身との感覚の間に6つのズレを見出している(伊藤 2008)ように、「実習での体験と実習生自身の感覚から生じる様々なズレ」が引き起こす「リアリティショックの様相の一部」として触れられていることが多い。

よって、本研究では実習での体験と実習生自身の感覚から生じる様々なズレの内の、「職員像のズレ」にあたる部分に主として焦点を当てていることを付記しておく。

また、当研究では、実習指導施設の職員が参画し、研究対象は、介護への職業選択を現実的に検討する段階である介護福祉士養成校の全実習過程を終了した2年生とした。このことで、介護実習生が実習において抱いた違和感を単に考察するにとどまらず、介護現場で行われている介護のあり方そのものを再考し、介護現場のケアの質の向上に資するための一助としたいと考える。

II 研究方法

1 対象

X県の介護福祉士養成校A校において、2011年11月時点で全実習終了後の2年生43名。

2 調査方法

「実習振り返りシート」(以下:アンケート)の自記式にての集合調査を2011年11月時点で全実習終了後の2年生43名に対し実施した。

表1 グループインタビュー参加学生の属性

| 氏名 | 年齢 | 性別 |
|----|------|----|
| A1 | 20歳代 | 男性 |
| A2 | 30歳代 | 男性 |
| A3 | 40歳代 | 女性 |
| A4 | 50歳代 | 女性 |
| A5 | 20歳代 | 男性 |
| A6 | 40歳代 | 女性 |

その中で、実習を経て強く違和感を抱いた学生および、「学び」とのギャップや、介護に対し感じる魅力の変化が大きかった学生の中から、研究の趣旨を理解し協力の同意を得られた6名の学生を対象にグループインタビューを実施した。なお、参加者の属性は表1の通りであるが、前職や入学の経緯などは匿名性保持のため、本稿では言及しないこととする。

3 調査実施期間

- ・アンケート実施：2011年11月10日
- ・グループインタビュー実施：2011年11月22日

4 主な調査内容

①アンケート

表2の通りである。Q1. 実習を経験して抱いた違和感の度合（7段階評定尺度法）、Q2. 「違和感」を抱いたエピソード（自由記述）、Q3. 実習を経ることでの介護に対する魅力の変化の度合い（7段階評定尺度法）にて調査した。

②グループインタビュー

実習（第1段階～最終実習を問わず）において違和感を抱いたエピソードとその時の思いや考え、抱

表2 実習振り返りシート

■Q1. 今までの介護実習を通して、あなたは、「学校で学んだこと」と「実習現場で行われていたこと」の間にギャップを感じましたか？あなたの感じた「ギャップの度合い」に最も近いものに○をつけてください。

全くギャップを感じない ← 1 2 3 4 5 6 7 → とてもギャップを感じる

■Q2. 上の「Q1」で「1」をつけた方以外にお伺いします。「学校で学んだこと」と「実習現場で行われていたこと」の間に感じたギャップとは具体的にどのようなものですか、その時の様子や出来事も詳しく交ぜながらご記入ください。（自由記述）

■Q3. 介護実習を経験する前と、経験した後では、あなたが感じている「介護の魅力」に変化はありましたか。変化の方向性（たとえば、「より魅力的に感じるようになった」とか、「魅力を感じられなくなった」など）や変化の内容は聞いませぬ。あなたの感じた「変化の度合い」に最も近いものに○をつけてください。

全く変化していないと思う ← 1 2 3 4 5 6 7 → とても変化したと思う

◆ご協力ありがとうございました。

いた違和感が現時点ではどう影響しているかを、約90分間、機器を用いての録画・録音を行いつつ半構造化面接で聴き取った。

5 調査に際しての倫理的留意

アンケートの調査実施に際して、調査対象者への調査目的の説明を行い協力の同意を得た。また、アンケートの内容は、協力者の介護に対する価値観などが反映される性質であることを考慮し、養成校における成績評価に一切関わりのないことの説明を行った。

グループインタビューに関しては対象者の6名に改めて同意を得た。調査データの取り扱いに際しては、対象者のプライバシー保護に留意し、データ管理責任者を決めて一元的に管理を行った。

6 分析手順

①アンケート

「Q1. 実習を経験して抱いた違和感の度合（7段階評定尺度法）」について、その平均値は4.9、標準偏差は1.5であった。又、「Q3. 実習を経ることでの介護に対する魅力の変化の度合い（7段階評定尺度法）」について、その平均値は4.7、標準偏差は1.8であった。

「Q2. 「違和感」を抱いたエピソード（自由記述）」については、その内容を「1. 言葉遣い」「2. 知識・技術の欠如」「3. 倫理性・感性・向上心の欠如」「4. 形骸化した介護」「5. 学校での学びを超えた気づき」の5カテゴリにアフターコーディングを行った。

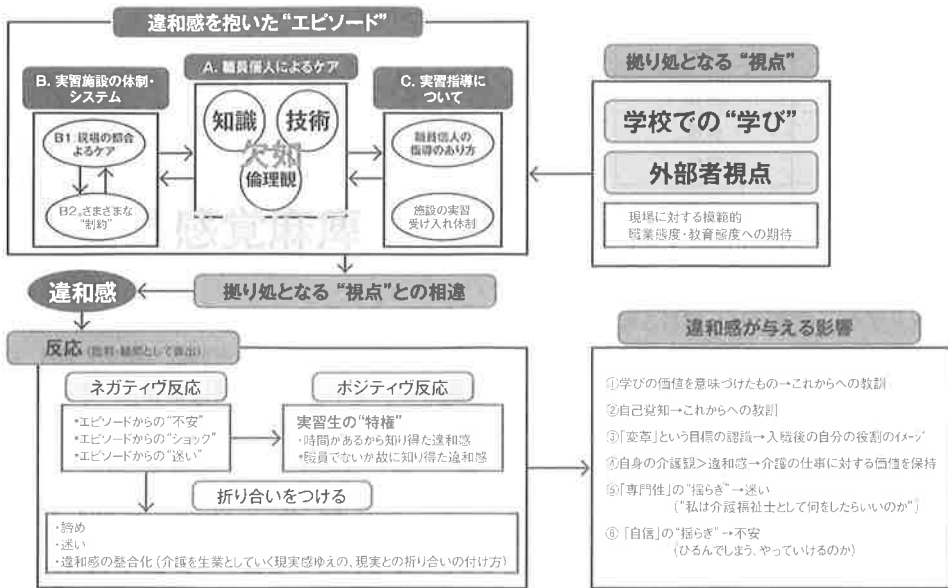
グループインタビューの協力者選抜にあたっては、このアンケートのみを参考資料とし、Q1、Q3における度合いの高い者を、Q2の自由記述から読み取れる関心の所在になるべく偏りがないように配慮しながら選定した。選抜メンバーの「Q1」における平均値は5.0、「Q3」における平均値は5.3であった。

②グループインタビュー

内容の録画・録音データを基に逐語録を作成した。録画データは主に発言者以外の非言語的メッセージを分析の参考にするために用いた。

この逐語録をKJ法におけるグループ分けの手法により、「ラベルづくり」→「小グループ化」→「表札づくり」→「中グループ化」の段階を経て類型化を試み、グループ間の関係性に着目して図解化（図1、図2参照）する作業を行い、それを基に考察を行った。

Ⅲ 結果と考察 (図1 参照)



※語りの引用は「グループインタビュー逐語録」より原文を用い、説明が要される部分には（ ）内に言葉を補っている。
 ※適宜、図中の「中グループ」もしくは「小グループ」単位で「(〇例)」と例数を記す。これは、グループごとのラベル数を指す。

図1 実習先で実習生が抱く“違和感”の生成過程とその影響

1 拠り所となる視点 (16例)

実習生は、現場で起こる職員と利用者の関係性から生み出されるエピソードを、「学校での学び」との対比からだけでなく、現場に対する模範的職業態度・教育態度への期待—すなわち「外部者視点」との対比とからも見ている。

まず、【1】の以下に挙げる部分では、「学校での学び」と対比させて、以下のような違和感が指摘された。

【1】私たちは学校で、例えばトイレ誘導する時も耳元で他の人に聞こえないように、トイレどうですか、みたいに習いましたけど、利用者さんに何か説明してお伝えする、特にあの一、危険なことしようとする時、制止する場合なんですけど、すごく大きな声で、なんしてんの!! みたいな感じで言われるんですよ。

更に上記に続き、今度は「外部者視点」と対比させて、違和感が指摘されている。

その人をほんとにまあ、注意したりしないといけ

ないことがあっても、その一、なんていうの、ホールに響き渡るような声で怒鳴りつける意味はあるのかなっていう。怒られているところを見られているなんて、誰でもいい気持ちしないじゃないですか。怒られるということ自体がまあ、ちょっとどうかと思うんですけど。

更に以下では、このエピソードが招く利用者の二次的な不利益にも眼が向けられ、「違和感」の根拠として語られている。

その人だけじゃなくて周りの人にもそういう、あの人はよう怒られている人で、変な人や、みたいになつてしまうと、やっぱりその小さな社会ですけど、利用者さん自身の関係に響いてくるんじゃないかなってというのがすごくあって。

更に、この「違和感」には以下のような「学校での学び」が根拠とされている。

認知症のなぜその人がこういう行動を取るのか、その行動にはちゃんと意味があって……ということ

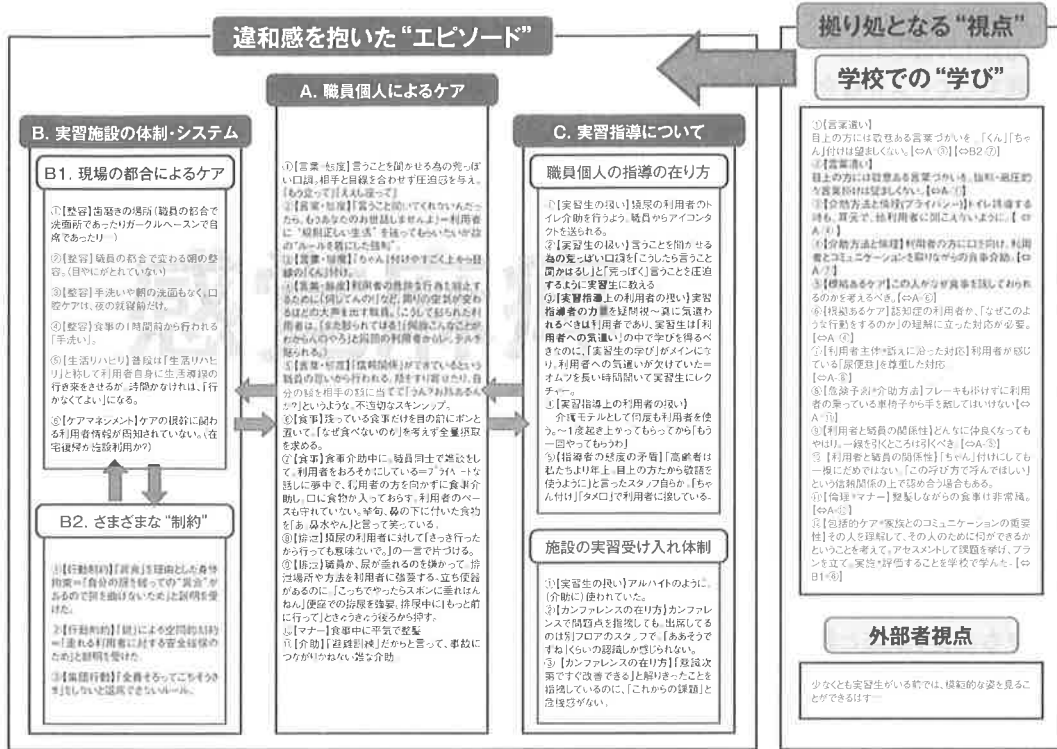


図2 実習生が違和感を抱く介護現場の“エピソード”と「違和感の根拠」となるもの

がわかってないのでは (Fさん)

この例のように、「学校での学び」と「外部者視点」という二つの視点と、実習指導施設で目にした出来事との間にズレが見られた場合、「違和感」が表出されており、「違和感を抱いたエピソード」の多くからは、現場の「感覚麻痺」²⁾の存在が示唆される。

2 違和感を抱いたエピソード (30例)

図2参照。

違和感を抱いたエピソードは、「A. 職員個人によるケア (11例)」「B. 実習施設の体制・システム (11例)」「C. 実習指導について (8例)」の三つのカテゴリに分類できた。

3 「利用者より優先されるべきではない存在」としての実習生 (3例)

実習生は、【1】で確認したように、「外部者」として客観的にケアの現場で起こることを評価しているだけでなく、「利用者より優先されるべきではない存在」と自覚している様子が【2】から見て取れる。それゆえに、実習生は、利用者をないがしろ

にしてまで実習生指導を優先する姿勢や、「外部者視点に無自覚な職員の姿」に違和感を持ち得る。

【2】(実習において) 僕は勉強させてはもらってはいるんですけど、利用者さんの部分ありきの僕は勉強やと思っているんですけど、そのときにすごく、おむつが開いている時間がすごい長いんです。で、ここがねっていうって言われると、ここが大事に拭かなあかんとかってわかる? って言わはった時とかに、この人がすごく、ないがしろにされている気がして。僕等の勉強のためなんですけど、(中略)僕はプラスアルファっていうふうに思わなきゃならない… (Bさん)

4 違和感に「折り合い」をつける (4例)

また、「利用者より優先されるべきではない存在」であることは、実習生の立ち位置に関わることであり、実習生は実習先に「勉強させてもらっている」という一種の弱みを抱かせる。加えて、実習生とは、「知識も技術もまだ血肉化しておらず“一通りは知っているがまだ使いこなせない”段階で利用者に対峙し、振り回され、困惑し、揺らぎ、出来ない自分

と向き合う」(伊藤 2008) 存在である。

そうした実習生の置かれている状況は、「実習の最終段階を経ていよいよ介護を職業選択していく」という現実感と相まってか、実習生自身が抱いた「違和感の整合化」「諦め」という形で折り合いがつけられている。その一例が【3】である。

【3】僕はそういう(違和感を感じる介護をされている)方の対応を見た時にはじめの方はなんか(中略)、「働き始めたらそういうのは、色々言うていこう」という気持ちがあったんですけど、実習重ねるうちに、「こういう方って沢山いるし考え方があまりかわる事は無いんやろうな」って思うようになって、どこの施設にもあの大概いらっしゃるんやろなって思って、今はなんかそういう対応を見て「ああこういう人とは働きたくないなあ」って思うだけになりました。(Bさん)

5 違和感をもたらす反応と影響(図1参照)

実習生が実習先で「拠り所となる視点との相違」を認めるエピソードに対峙した時、違和感が生まれ、その違和感の結果生み出される「反応」は、エピソードへの「批判」「疑問」の形をとって表出された。この「批判」「疑問」に付随する形で、「不安」「ショック」「迷い」などの否定的反応【4】が吐露される。(6例)

【4】異食があるためなんですけれども、あの手をこう、前へ真っ直ぐに曲げられない(ように)ずっと(中略)がんにがらめにされていて鍵のかかった中におられて、外出もされるんですけども、その拘束された状態であの外出されるので、うーん、その一、解決っていうのはすごい難しい、そのまま生きておられるずーっと生きておられるっていうのは、私にとってはすごいショッキングなことだったんですけども、(中略)私にとっては解決策ってわからないんですけど……(Dさん)

一方で、肯定的反応を直接発生させたエピソード(学校での学びを超える想像以上の学びなど)を語った実習生はいなかったが、「否定的反応」の思考的転換として「肯定的反応」を語るケースが確認された。

そして、肯定的反応を支えている拠り所は専ら、「違和感」自体を「実習生の特権」とする思考であり、「違和感」を今後の教訓へと転換しようとするものである。その一例が【5】であった。

【5】私たちは最初は机の上で勉強して実習でギャップを感じたりっていう、ちょっと遠回りのな感じで、直接もう、すぐに毎日(現場に入って学べば)いいじゃないかと最初は思ってたんですけど、最近よく思うのがやっぱりその、何も知らずにその職場に行くとかやっぱりそれが、間違っていたりおかしいっていうことに気付かないで、「ああこういうもんなんだ」ってきつと思ってると思いますね。それが、自分なりに勉強して得たことと違ったりやっぱり介護は根拠とかだったり、考察だとか気づき、気づいていくことが大事っていうのを学んで……(Fさん)

このように「違和感を抱く様なエピソード」に対峙した当時の反応は様々であるが、「グループインタビューの時点で違和感がどう影響しているか?」の質問には、違和感を抱いたその時に「自分のスタンス」(自分はどうしたいか)が見出せる場合と見出せない場合で、その影響の様相は左右される傾向にあった。

自分のスタンスを見出した場合、違和感は「学びの価値を意味づけたものや、「自己覚知」「今後への教訓」「現場の変革」という目標やそれに向けての行動の優先順位の自覚」【6】など、肯定的な影響を与える傾向にあった。(3例)

【6】僕は10年かかって20年かかって「これ間違ってる」って思ってることすべて変えたいなとは思っていますね。だから、今こうすぐ煮えたぎっていますね。(中略)でもそれはそれなりに、やっぱりチームワークというのは大切やから、自分ばかり暴走してもあかんし、やっぱり職員間のなんか信頼関係とかちゃんと築けていかなあかんし、しっかり変えるなら現場を作る土俵を作ってから革命を起こしたいなとは。いや、ほんまに思いますね。(Eさん)

また、違和感に肯定的な意味付けはせず、深入りもせず、自分のスタンスを大事にしようとする傾向【7】も見られた。(1例)

【7】全然仕事として嫌いなわけではないし、別にその人の援助するわけではないし、その人と仕事をすることが一番大事じゃないし、対利用者さんとの関わりとか利用者さんに対するものっていうのが自分の仕事やと思ってるんで(違和感を感じたことは)あまり大事なことはないのかなっていう風に。(Bさん)

一方、自分のスタンスが見出せなかった場合、あるいは見出せないような事象に対峙した場合、グループインタビューの時点での違和感は、今後、自らが介護職としてやっていけるのかという揺らぎ—すなわち「自信の揺らぎ」【8】を生み、「不安」や「迷い」として作用している。(2例)

【8】最初はこの学校に入った時はほんとに介護のこと何にも知らなくて真っ白な状態で入ってきたので、あの実習によってそういうあのいろいろ……ひるんでしまうというか、なんやら楽なところはどこも無いんだなというのがすごい実感できて、その分なんかやっていけるのかなとちょっと感じています。(Dさん)

IV 結 論

1 拠り所となる視点について

実習生は、現場で起こる職員と利用者の関係性から生み出されるエピソードを、「学校での学び」との対比だけでなく、現場に対する模範的職業態度・教育態度への期待—すなわち「外部者視点」と対比させ、見ていることが示唆された。

2 違和感を抱いたエピソードについて

違和感を抱くエピソードは、一部のケースを除きほとんどが、現場の職員の「感覚麻痺」に起因する様である。この「感覚麻痺」は、「職員個人のケア」のみならず、「実習施設の体制・システム」や「実習指導」を通して現れている。

3 違和感を抱いた時の反応について

当然、違和感を抱いた結果としての反応は、「批判・疑問」であった。こうした批判・疑問を分析すると、それらは「不安」「ショック」「迷い」を伴うが、一方では批判・疑問もありながら違和感に折り合いをつけようとする場合があることを認めた。

このように、「現場の感覚麻痺」を違和感として鋭くあぶり出し反発する一方で、「違和感」に折り合いをつけるべく葛藤する実習生のアンビバレントな様相を規定しているのは、「利用者より優先されるべきではない存在」としての実習生の立場であると推測される。

実習においても当然ながら、実習生よりも利用者の尊厳が第一であることは、【2】の例が示すように実習生自身も気づいているだろうと推測される。しかし実習生は「勉強させてもらっている立場」も

同時に自覚しているから、おかしいと感じても指摘しづらい立場に置かれ、遠慮してしまう。そして、「勉強させてもらっている立場」は、実習生である期間のみならず、就職後「新人」と呼ばれる間は少なくとも続くのだから、この様相は就職後も多かれ少なかれ影響し、現場の感覚麻痺を助長するリスクが想定される。

4 違和感を抱いた時の反応と、「違和感」が今の自分に及ぼしている影響について。

違和感を抱いたエピソードについて、自分のスタンスが見出せなかった場合、あるいは見出せないような事象に対峙した場合、違和感の実習生自身の「専門性の揺らぎ」「自信の揺らぎ」を生み出す要素として作用する傾向があった。

しかし、自分のスタンスを見出した場合、違和感は肯定的な意味付けがなされる傾向にあり、実習生自身の持つ内的思考の力で自己肯定感に転換できる性質を帯びている事が明らかになった。これは、「違和感」の認識自体が、さまざまなリアリティショックがもたらす「専門性の揺らぎ」「自信の揺らぎ」を克服し、知識・技術の不足を乗り越えていこうとする原動力になり得る³⁾ 一面を持つことの裏づけでもあった。

その意味で、「職員像のズレによる違和感」は実習生の介護職就業へのモチベーションを下げるようなネガティブな一面しか持たないものでは決してなく、実習生自身の介護観が問われ、認識する機会として、ポジティブに働き得るものであることが確認できた。

5 全体から考察できること

このように「違和感」は、実習生にとってネガティブにもポジティブにも働きうる可能性を踏まえると、必要なのは、「違和感から実習生と現任の職員双方が共に学ぶ姿勢を共有すること」を通して、「実習生が違和感を抱いたこと自体が現場から評価される」ことではないだろうか。その為には、実習生の「これはおかしい」「私ならこうする・こうしたい」という思いや考えを引き出し、それを受け止めた上で専門的見地から批評する姿勢が現場の実習指導者をはじめとする職員には求められるものと思われる。

しかし、本稿でも考察した「実習生の立場」を鑑みると、実習生の「これはおかしい」「私ならこうする・こうしたい」という思いや考えを引き出すことは、必ずしも容易ではないと想像される。

この課題をクリアしていくために必要なのは、現

場の職員が「実習」を、「後進の育成の場」という枠組みを超え、「職員の学びの機会」としての位置づけもできるよう、実習の意味づけの共通理解を職場内研修などを通じて図るなどの対策であろう。更に、現場にこうした流れを作るためには、全国各地で行われている「実習指導者講習会」を通して、「職員の学びの機会」として「実習」を位置づける視点が広がるよう、その講習内容の検討も進められるべきではないかと考える。

また、こうした実習生の違和感が養成校等を通じて体系化され、それが直接的あるいは間接的に現場へフィードバックされるようなシステムが現場と養成校間で構築される必要もあろう。このように現場と養成校、それを支える学習資源のそれぞれを整備しつつ、実習生の違和感から現任職員が学ぶ姿勢を涵養していくことが求められるのではないだろうか。

6 当研究の限界と今後の課題

今回の研究で対象にしたのは、A校1校の中から選抜した実習生の語りであり、実習生の抱く違和感とその影響についてのごく一例に過ぎず、そこから見出した知見を無条件に一般化することはできない。

また、インタビュー対象者の選抜において、「実習を経験して抱いた違和感の度合いが高い者」という条件を設けたので、比較的問題意識の高い傾向にある実習生に当てはまる性質を帯びている結果であること、結果的にグループインタビュー対象者の中心的年齢層は30代～40代であることを考えると、必ずしも実習生全体を代表した結果とは言えない点を踏まえておく必要がある。

また、実習生が抱いた違和感が、その後養成校においてどのように教育されているのか、その結果どう違和感が意味づけられていくのかという、「違和感」への学校からのフォローとその影響の実態については調査を行っておらず、この視点の欠落は否めない。

今後、X県下の養成校B校においても同様の調査を行ったので、その結果を分析するとともに、引き続き包括的な考察を深めていきたい。

謝 辞

本研究にあたりアンケート・グループインタビューにご協力いただきました教員・学生の皆様、ご指導いただきました広島国際大学教授矢原隆行先生に心より御礼申し上げます。

◆注

1) 1974年にKramerが発表した概念であり、わが国にお

いては1980年代以降、主に看護分野での取り組みに活用されてきた。

2) 菊地(2012)は、「感覚麻痺」を「様々な日常の“おかしなこと”が積み重なることで、おかしなことも“施設ではあり”という感覚になってしまい、その非常識さに気づく感覚を麻痺させていった」状態として使用しており、本稿でもその意味合いに倣って使用する。

3) 伊藤(2008)は、実習生が実習段階を経るに従い、「ショックな出来事」を「違和感」として語るようになる変化を指し、「ケアをする立場から、実習生なりの理想とするケア観が育ち、現実のケア場面とのズレを認識しつつある事が想像される」と述べ、実習生の「違和感」の認識自体に実習生の成長を見出している。

◆文 献

安梅勅江 2001『ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー法—科学的根拠に基づく質的研究法の展開』医歯薬出版

伊藤健次 2007「介護実習におけるリアリティショック—その様相と肯定的側面について」『山梨県立大学人間福祉学部紀要』2, pp.11-18

伊藤健次 2008「実習段階に応じた学生指導の方法に関する一考察—第一・第二段階実習を比較して」『山梨県立大学人間福祉学部紀要』3, pp.33-44

上田智子 2005「介護学生のリアリティショックの様相」『岡崎短期大学研究紀要』38, pp.35-43

大和田猛ほか 2008「社会福祉援助技術現場実習生から見た特別養護老人ホーム職員のレジデンシャルソーシャルワーカーとしての専門職資質をめぐる若干の課題—学生の白山記述による具体的把握を通して」『青森保健大雑誌』9(2), pp.109-122

菊地雅洋 2011『人を語らずして介護を語るな。masaの介護福祉情報裏板』ヒューマン・ヘルスケア・システム

菊地雅洋 2012『人を語らずして介護を語るな2 傍らにすることが許される者』ヒューマン・ヘルスケア・システム, pp.53-57

社団法人日本介護福祉士会 2004「現場に役立つ介護福祉士実習の手引き—指導者・教員共通」環境新聞社

社団法人日本介護福祉士会 2009『介護実習指導者テキスト』社会福祉法人全国社会福祉協議会

田垣正晋 2008『これから始める医療・福祉の質的研究入門』中央法規出版

高橋菜穂子 2011「ある児童養護施設職員の語りのKJ法による分析：テキストの重層化プロセスからとらえる実践へのまなざし」『京都大学大学院教育学研究科紀要』57, pp.393-405

田中安平 2005『介護の本質』インデックス出版

田中安平 2009『新・介護の本質』インデックス出版

田中博晃 2010『KJ法入門：質的データ分析法としてKJ法を行なう前に』

矢原隆行 2010『よくわかる介護福祉研究入門—現場の気づきから課題解決、成果の共有、そして社会発信へ』保育社

吉岡なみ子 2011「介護職の「専門性」に対する認識と評価—介護老人保健施設の場合」『生活社会学研究』17, pp.71-83